

れる。

女性フィールドワーカーは、男性より相対的に多くの役割を担い、それぞれの事情を踏み越えフィールドに立っている。本書は子育てに焦点をあてたが、不妊治療や介護といったライフイベントに臨む研究者も、今後確実に増えるだろう。特に不妊治療は主に女性に多大な身体的・精神的負担がかかるうえに、そもそもゴールがあるのかも見通せず、さらに治療の個人差が大きく、非常にプライベートな内容を含むため周囲の共感を得づらいという事情もある。「続けたかったら続ければいい」「子どもを産んだから（治療中だから・介護だから）しょうがない」という一見「寛容な理解」は、女性研究者の選択肢を増やすための思考を放棄しており、結果として生き残る女性研究者は「なりふり構わぬ個性的な人」という偏ったレッテルから抜け出すことができない。さまざまな立場の「生きやすさ」を具体例から考え、徐々に組織・社会を変えていくためにも、本書から学ぶことは多い。

椎野若菜・的場澄人編、『女も男もフィールドへ』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ12）古今書院、2016年、226 p.

木村大治 *

本書は「100万人のフィールドワーカーシリーズ」の1冊として刊行されたものである。表題のとおり、フィールドワークにおけ

るジェンダーの問題、とくに女性のライフコースとフィールドワークについての論考がその中心となっているが、そのほかに、セクシュアリティを調査対象とする研究として、インドの「ヒジュラ」と呼ばれる去勢した人々、およびゲイの人々を扱った2編の論考も含まれている。

一読しての感想は、たいへん面白い、しかしたいへん重い本だ、というものであった。女性研究者たちがさまざまな困難に出会うフィールドに突き進んでいく姿は、凡庸なエスノグラフィーよりも鮮やかにジェンダーの問題を活写している。一方、その過程で出会う女性研究者としての苦労については、いくつかの話は私が個人的に知っていることもあり、平常な気持ちで読み進めることが難しい部分もあった。

本書の表題は『男も女もフィールドへ』ではなく、『女もフィールドへ』でもなく、『女も男もフィールドへ』である。まさにこの点に、ジェンダーや排除をめぐる問題の微妙さが集約されているように思われる。本書の著者たちは、女性12人、男性3人と、大きく偏っている。これは無論、さまざまなハンディを背負うことが多い女性にとってのフィールドワークの可能性を考えようという、本書の目的からのことだろう。しかしおそらく『女も男も』という表題は、そこだけに留まっていはいけないという方向性をも示唆しているのである。私自身は、研究とともに育児にも携わってきたという経験をもつが、評者の選択において考慮されただろう、そういった事情の記述も交えつつ、若干の議

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

論を展開してみたい。

私は 1994 年に結婚したが、入籍はしていない。一緒になるときに妻から夫婦別姓にしたいと言われたのだが、そのとき考えたのは、もし私が「高橋大治」（妻の姓は高橋である）になればと言われたら、それは嫌だなあ、ということだった。私が嫌なのだから、妻も姓を変えるのは嫌だろう。それなら夫婦別姓でいこう、そう考えたのである。結婚したその年に長女が生まれ、1996 年長男が生まれた。ふたりとも産まれたときの姓は高橋だったが、ひとりは木村にということで、息子の姓を変えることにした（これはたまたま子どもがふたりいたからできたことであって、一般化できる話ではない）。まず認知したあと、家庭裁判所に行くなど、結構ややこしい手続きだったと記憶している。キョウダイで姓が違うことになり、学校の友達に「（親が）離婚したん？」などと聞かれることがあったというが「いやーこれには深い訳があってね」などと答えていたそうである。もちろん子どもたちには別姓にした理由は説明してある。家族でキャンプに行ったとき、それぞれ「我が家の自慢」を発表するというイベントがあったが、娘はそこで「名字がふたつあること」を挙げていた。また、息子だけを木村にしたのは私たちが勝手に決めたことなので、「大人になって変えなければ自分で変えられる」ということも言っている。

私は 1994 年当時、福井大学に勤務しており、カメルーンの狩猟採集民の調査をしていた。妻は兵庫県にある企業の研究所に勤めていた。長女は妻が福井に来てそこで産んだ

が、私と妻の両親はともに高齢で育児を手伝ってくれることはできなかったの、ふたりだけで育てることにした。出産後、妻は復職し、私は福井と兵庫を行ったり来たりの生活を送ることになった。その後私は京都大学に移り、家族で一緒に暮らすことができるようになったが、1999 年まで 5 年間、フィールドに出ることができなかった。妻ひとりを置いて出かけるのは実際上無理だったからである。そういった事情のある先輩の研究者に話したところ、同情してくれつつも「フィールドに出ないと勘が鈍るからな」と言われ、心に暗い影が差したものである。5 年ぶりにフィールドに出て帰国したとき、妻と子どもたちは JR の駅まで迎えに来ていた。ロータリーで「父ちゃんが帰ってきた、父ちゃんが帰ってきた」とびよんびよん跳びはねる姿は、今でもはっきりと覚えている。

このように書くと、いかにも大変なことをしてきたように思われるかもしれない。しかし私自身は、それはたまたま選んだひとつの生き方であって、さして特別のことをしているつもりもない。また、本書に書かれている話を読んで、「著者たちは立派だけれど、私にはそんなことはできそうもない」という印象をもつ人もいるだろう。しかし、それは本書の意図するところではあるまい。実際、たいへんなのはたしかなのだが、それをある種「特別に」たいへんなことだと見るまなざしを、少しずらしていけないのだろうか。以後、この点を中心に話を進めてみたい。

私たち夫婦は別姓を選択している。私は、夫婦別姓法案が成立すれば入籍してもいいと

ずっと思っていた（妻はまた別の考えのようだが）。しかし周知のように、2015 年末、最高裁は夫婦別姓を認めないという民法の規定は合憲であるとの判断を下した。私は憤慨してツイッターに「夫婦別姓で社会が壊れるならアフリカの社会なんかとうに壊れとるわ」と書き込んだ。アフリカに限らず、夫婦別姓は世界的にはマジョリティである。それなのに「社会が壊れる」「家族の一体感がなくなる」といった議論をしているのが、とても馬鹿らしく思えたのである。ただし日本でいま急に、全面的に夫婦別姓を実施したら混乱が生じるだろうこともたしかである。歴史的慣習はそう急に換えられるものではない。しかし、やりたい人たちだけが別姓を選択し、同姓を選択したい人はそうするという「選択的夫婦別姓」にすれば、何の問題もないのである。

なぜ「社会が壊れる」などという乱暴な議論が出てくるのだろうか。もちろん、夫婦同姓、夫婦別姓それぞれに、利点、欠点を挙げるができる。たしかに、別姓だと、先に書いたような不便なこともある。そして同様に、同姓を強要しても姓を変えた方が不利益をこうむることになる。夫婦別姓の社会で家族が壊れないのは、別のさまざまなやり方で一体感を埋め合わせているからに違いない。そのように、多少の不利益は埋め合わせる方法はあるはずなのだ。問題は、夫婦は同姓であるのは「当然だ」「普通だ」という思い込みである。この「普通」という考え方を侮ることはできない。それは他の判断をすべて覆い隠す、強い力をもつからである。実際日本

では、選択的夫婦別姓さえ認めようとしないう「普通」が、国会議員の過半数、さらには最高裁にまで蔓延している。一しかし一方、もし夫婦別姓のみを「普通」としてしまったとしても、事情は変わらないだろう。対立する片方のみを「普通」とすることの無理が再び現れ、状況が裏返しになるだけだからである。

このような状況が、本書のテーマである「差別」「格差」を論じるときにはつねに現れてくる。本書に書かれているのは、主として女性フィールドワーカーのロールモデルである。そこには、つねに「女性がフィールドワーカーになるのは無理だ」という通念の裏返しとしての、「女性はがんばってフィールドワークをやるべきである」「それを普通にするべきである」というメッセージが読み取られる可能性が孕まれている。それがあつ種の強制力をもってしまうというのは、著者たちの本意ではないだろう。本書にはそういった側面が少し強く出すぎているように思う。もう少し『女も男も』の表題のように、男性側からの事例なども取り込んだらよかったのではないだろうか。

女性が、そして男性も、フィールドワークをおこなうに際してはさまざまな困難が伴う。本書から汲み取るべきは、その困難を小さくする工夫だけではなく、困難ゆえに生じがちな「特別感」を消し、さまざまなフィールドへの行き方、そしてフィールドでの生き方を肯定する道筋なのだろうと思う。